

「こんなんでいいんです。」

わだいのこじん

学生が変わった？

地域現場で学ぶ教養科目「熊野フィールド体験」を先頃実施しました。これはフィールド体験学習を通じ、自然の素晴らしさ、農林業や生活技術の重要性、地域資源活用の可能性について理解することが目的。データ収集や数学的解析法の基本も講義するので、学生は数日間教員と寝起きを共にし、日中は現場調査、夜は座学と調査のまとめに励みます。

この合宿が始まってすぐ、毎年フィールドを提供してくれている北海道

大学和歌山研究林の職員さんがおっしゃいました。「ここの学生さんは雰囲気が変わりましたね」。実は引率した和歌山の教員らも気付いていました。「こじは何か違う」と。

学生に教員の言葉が通じていない。筆者も密かに悩んでいました。こんな柔(やわ)なことを言っている、教員としてどうか、とお叱りを受けそうですが、共同生活のルール、学習への積極的な関与などについて、こちらが期待する通りには学生は動いてくれないことが目立ったのです。「学生は何も考えていない」と一刀両断する

若者と大人

教員もいましたが、学生は学生なりの判断で動いているようでした。その行動が社会通念の中で良いか悪いかは別として。いままでの社会通念が「通じなくなった」兆候に「大阪朝日新聞」また、明治初期に野球やテニスなどが日本に入ってきた時、日本固有の肉体鍛錬の、精神的な運動を嫌い、気楽でハイカラな遊技を好むのはよくない」と苦言を呈する校長先生の言葉も記録に残っています。

大人の生き方

若者の行動を嘆く大人はいつの時代にもいま

た。昭和初期に熊野の町村長らの嘆きとして、「農村の清らかさ、静かさを若者は喜ばず官能的な刺激と享樂のある都会に競って出て行く。だから農村は苦悩の底にうめく」(昭和3年、大阪朝日新聞)。また、明治初期に野球やテニスなどが日本に入ってきた時、日本固有の肉体鍛錬の、精神的な運動を嫌い、気楽でハイカラな遊技を好むのはよくない」と苦言を呈する校長先生の言葉も記録に残っています。

最近では、安保関連法案に対する学生の行動が話題となりました。法案成立への手続きがおかしい、将来が不安だ、と声を上げた学生たちに対して評価がある一方、政策への対案がない、付和雷同的に気分で行動しているから危険だ、などの批判も見られました。それは大人に従わずに個々の価値観で動き始めた若者に対する戸惑いにも見えました。意見の相違を受容したいシヨックは時に嘆きや高圧的な批判になることが先の歴史の「コマ」からも推測できます。



森林内ネットワークシステム(和歌山研究)を学ぶ



林地内の道路整備授業

多くの学生が一時も離れないスマートフォンは探索すると即座に答えが出てきます。ほとんど考えなくても良いシステムです。しかし提示されたモデルと異なる自分なりの判断を選択することは、すくなく難しい。ここでは教養や社会経験が試されるからです。

最近の議論の対象となった憲法第9条を抽象的だという意見があります。が、この高邁な抽象性を一本の幹として、枝葉の部分で熟考し、意見を戦わせ、最適な方法を選択すること。それが教養の持つ力ではないでしょうか。

若者とコミュニケーションができないということは、むしろ大人の側に確固たる幹があやふやだからではないか。たとえ意見や思想が違っても、確固たる幹は相手の胸に響き、お互いの立場を尊敬できるはず。そこから若者と大人の議論が始まるのではないか。

若者がしっかりとした幹を形成するための教育と同時に、大人もまた自分の姿をもつ一度見直そう、と自戒しています。

湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。



プロフィール